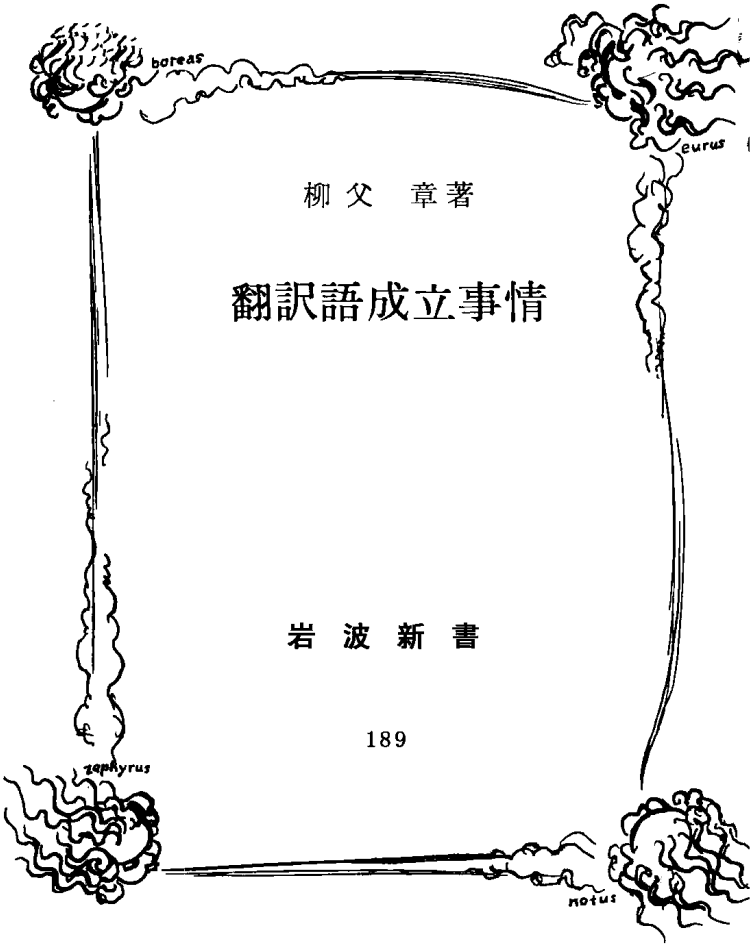
柳父　章著

翻訳語成立事情

岩波新書

189



柳父　章著

翻訳語成立事情

岩波新書

189

柳父 章

1928年東京に生まれる
1961年東京大学教養学部教養学科卒業
専攻—翻訳論
現在—評論家
著書—「翻訳語の論理」
「翻訳とはなにか」
「翻訳の思想」
「翻訳文化を考える」
「比較日本語論」
「『日本語』をどう書くか」ほか

翻訳語成立事情　　岩波新書(黄版) 189

1982年4月20日　第1刷発行 ©
1982年6月10日　第3刷発行

定価 380円

著　者　柳父章（やなぶ あきら）

発行者　緑川亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発行所　株式会社 岩波書店
電話 03-265-4111
振替 東京 6-26240

印刷・製本　法令印刷

落丁本・乱丁本はお取替いたします　　Printed in Japan

まえがき

本書で取り上げている「社会」「個人」「近代」などの翻訳語は、学問・思想の基本用語であるが、中学・高校の教科書や、新聞紙面などにもよく出てくるようなことばである。それにもかかわらず、たとえば日本の家庭の茶の間での家族どうしとか、職場の仲間どうしのくだけた会話の中では、まず口にされることがないだろう。よほど教育ていどの高い人の家庭などでもそうであろう。もし、くだけた場で、これらのことばを口にすれば、まわりの人々はふと居ずまいを正すか、座が白けるかも知れない。つまり、使われる場所が限られている。日本人の日常生活の場の用語ではなく、学校とか、書物など活字の世界とか、家庭の中で言えば勉強部屋の中での用語である。日常語とは切り離された、言わばもう一つの世界のことばである。私たちは、生活のそれぞれの場面で、こういうことばを使い分けている。たとえば、難しそうな本を読むようになった若者は、教室や友人との議論の場では、こういう固い語感のことばをよく口にしても、家庭で母親の前では、まず口にすることはないであろう。

日本の学問・思想の基本用語が、私たちの日常語と切り離されているというのは、不幸なことであった。しかし、それには漢字受容以来の、根の深い歴史の背景がある。他面から見れば、翻訳語が日常語と切り離されているおかげで、近代以後、西欧文明の学問・思想などを、とにもかくにも急速に受け入れることができたのである。ところが同時に、そこには、本書の至る所で述べているように、いろいろとかくれた歪みが伴っていた。

このような、私たちの宿命的な事実を、いいか悪いかと割り切るよりも、まず事実そのものを知ってほしい、と思う。それは、意外に、ほとんど知られていない。私が本書を書いた理由である。

本書で取り上げた初めの六つ、「社会」「個人」「近代」「美」「恋愛」「存在」は、幕末から明治時代にかけて、翻訳のために造られた新造語である。あるいは実質的に新造語に等しいことばである。あとの四つ「自然」「権利」(ただし「権」として)「自由」「彼」(「彼女」は新造語)は、日本語としての歴史を持ち、日常語の中にも生きてきたことばで、同時に翻訳語として新しい意味を与えられたことばである。以上二つの場合で、翻訳語としての問題は多少異なる。とくに後者の、伝来の日本語を翻訳語として用いた場合には、異なる意味が混在し、しかも矛盾している、という問題が重要である。いずれの場合にも、後に詳しく述べるように、翻訳語に特

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton

有の効果によって、ことばの意味の分りにくさや矛盾がかくされていて、人々に気づかれにくい、ということがもっとも重要であろうと思う。

なお、翻訳語の問題を取り扱う私の基本的な方法については、本文中のいろいろなところでも述べてあるが、とくに「近代」の章の第二節のところで、まとめて説いてある。

ここに取り上げた翻訳語については、私はこれまでにも、いろいろな面から論じてきた。本書の内容と共通する所の多い論文の初出文献名を次に掲げておく。

「社会」　著書『翻訳とはなにか』一九七六年、法政大学出版局
「個人」『文学』一九八〇年十二月号、岩波書店
「近代」『図書』一九八一年一―三月号、岩波書店
「美」　『図書』一九八一年五―七月号
「恋愛」『翻訳の世界』一九七九年十月号、日本翻訳家養成センター
「存在」『翻訳の世界』一九八〇年八―九月号
「自然」　著書『翻訳の思想』一九七七年、平凡社
「権利」「自由」「彼、彼女」　著書『翻訳とはなにか』

本書では、私の翻訳論における単語論の総まとめ、というようなつもりで、それぞれの初出論文と同じではなく、かなり削ったり、手を入れたりしてある。また、読みやすく、分りやすく書くということは、できる限り心がけたつもりである。

本書がこうして一冊の本としてでき上がるについては、岩波書店編集部の坂巻克巳氏のお世話によるところが大きい。

一九八二年一月

柳父章

目

次

まえがき

1 社会……1
society を持たない人々の翻訳法

2 個人……23
福沢諭吉の苦闘

3 近代……43
地獄の「近代」、あこがれの「近代」

4 美……65
三島由紀夫のトリック

5 恋愛……87
北村透谷と「恋愛」の宿命

6　存　在……107
存在する、ある、いる
7　自　然……125
翻訳語の生んだ誤解
8　権　利……149
権利の「権」、権力の「権」
9　自　由……173
柳田国男の反発
10　彼、彼女……193
物から人へ、恋人へ

1

社　会

――society を持たない人々の翻訳法

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

一　society にあたる日本語はなかった

「社会」ということばは、今日、学問・思想の書物はもちろん、新聞・雑誌など、日常私たちの目にふれる活字の至るところで使われている。しかも、比較的大事なところで使われていることが多い。この「社会」ということばは、society などの西欧語の翻訳語である。およそ明治十年代の頃以後盛んに使われるようになって、一世紀ほどの歴史を持っているわけである。

しかし、かつて society ということばは、たいへん翻訳の難しいことばであった。それは、第一に、society に相当することばが日本語になかったからなのである。相当することばがなかったということは、その背景に、society に対応するような現実が日本になかった、ということである。

やがて「社会」という訳語が造られ、定着した。しかしこのことは、「社会」—society に対応するような現実が日本にも存在するようになった、ということではない。そしてこのような事情は、今日の私たちの「社会」とも無縁ではないのである。そこで、society の翻訳がいか

に困難であるか、そのことを実感していた時代をふり返る必要がある、と私は考える。

まず、society またはこれに相当する西欧語の、日本語への翻訳の歴史をふり返ってみよう。

一七九六(寛政八)年、蘭学者稲村三伯の日本最初の蘭和辞書『波留麻和解』で、オランダ語の genootschap が、「交ル　集ル」と訳されている。この辞書は、品詞という考え方が定かでなく、原語の名詞が、動詞の形で訳されている。

一八一四(文化一一)年、長崎の通詞(通訳)、本木正栄による日本最初の英和辞書『諳厄利亜語林大成』では、society ということばが登場し、「侶伴　ソウバン」と訳されている。「侶伴」とは、今日「伴侶」と言うのと同じような意味である。「ソウバン」は「相伴」であろうか。

一八五五―五八(安政二―五)年、前述の『波留麻和解』を受けついで、もっと完成された辞書を作った桂川甫周の『和蘭字彙』では、genootschap が、「寄合又集会」となっている。

一八六二(文久二)年、堀達之助等編の『英和対訳袖珍辞書』では、society が、「仲間、交リ、一致」である。この辞書は、幕末―明治初期に、もっとも広く普及していた。

一八六四(元治元)年、幕末のフランス学の創始者、村上英俊の『仏語明要』では、société が、「仲間、懇、交リ」と訳されている。

一八六七(慶応三)年、ヘボン式ローマ字表記で知られているヘボン J. C. Hepburn の『和英

語林集成』を見ると、この書は和英と英和から成るが、その英和の部で、societyが、

Nakama ; kumi ; renchiu ; shachiu

となっている。すなわち、「仲間、組、連中、社中」というわけである。

一八七三(明治六)年、柴田昌吉、子安峻の『附音挿図英和字彙』では、societyが、「会、会社、連衆、交際、合同、社友」となっている。この辞書は、明治前半の時代、広く使われていた辞書である。

さて、以上をざっと眺めまわしてみると、societyまたはこれに相当する西欧語の訳語が、いずれも、狭い範囲の人間関係を表わすことばで表現されている、ということに気づく。

ところで、societyなど西欧語の意味はどうか。『オックスフォード英語辞典』(OED、一九三三年)によると、societyの項は、

(1) 仲間の人々との結びつき、とくに、友人どうしの、親しみのこもった結びつき、仲間どうしの集り。

(2) 同じ種類のものどうしの結びつき、集り、交際における生活状態、または生活条件。調和のとれた共存という目的や、互いの利益、防衛などのため、個人の集合体が用いている生活の組織、やり方。

などと述べられている。

これまで見てきた日本の辞書の訳語は、どれも、この(1)の意味にはかなり近い。が、(2)の意味はほとんどとらえていない。(1)の意味の、狭い範囲の人間関係ならば、当時の日本にも、似たような事実を見出すことができたのである。が、この後者の意味については、広い範囲の人間関係という現実そのものがなかった。したがって、それを語ることばがなかったのである。

当時、「国」とか「藩」などということばはあった。が、society は、窮極的には、この(2)でも述べられているように、個人 individual を単位とする人間関係である。狭い意味でも広い意味でもそうである。「国」や「藩」では、人々は身分として存在しているのであって、個人としてではない。

society の翻訳の最大の問題は、この(2)の、広い範囲の人間関係を、日本語によってどうとらえるか、であったと私は考えるのである。

二　福沢諭吉の訳語「人間交際」

福沢諭吉は、一八六八(慶応四)年、『西洋事情 外編』を出している。これは、彼じしん同

書の初めにも言っているように、チェンバース版『経済論』(Political Economy, for use in schools, and for private instruction 著者、発行年不明)の翻訳であった。『経済論』であるから、当然 society ということばは多く出てくる。次に、その一節と、参考のための私の直訳と、福沢の訳とを並べてみよう。

Society is, therefore, entitled by all means consistent with humanity to discourage, and even to punish the idle.

社会は、だから、人道にかなったあらゆる手段で、怠惰な人をおさえ、罰しさえもする権利を与えられている。(柳父訳)

故に人間交際の道を全せんには、懶惰を制して之を止めざる可らず。或は之を罰するも亦仁の術と云ふ可し。(福沢訳。傍点は引用者、以下同様)

ここで、society の、福沢による訳語は「人間交際」であることが分る。同書中で、福沢は society を、「交際」「人間交際」「交」「国」「世人」などさまざまに訳し分けているが、「交際」や「人間交際」がもっとも多く、これはその後も福沢が自分の著書で用いており、世にも広められた。前掲『附音挿図英和字彙』の訳語中に「交際」があったのは、その影響である。

ところで、この福沢訳における「人間交際」という翻訳語の扱い方に注目しておきたい。原

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor